近藤誠一氏講演会「これからの鎌倉」記録

日　時：平成 25 年 7 月 10 日（水）　18:00～19:00
場　所：鎌倉生涯学習センター（きらら鎌倉）
参加者：250 人

１　講師略歴

昭和 21 年生まれ。小学校 6 年から高校まで鎌倉で過ごす。

昭和 47 年に外務省に入省、広報文化交流部長などを経て、平成 18 年から 20 年までユネスコ日本政府代表部特命全権大使、同年 9 月から駐デンマーク特命全権大使を歴任、平成 22 年 7 月 30 日、第 20 代文化庁長官に就任、平成 25 年 7 月 8 日退任。

在任中は、「文化財レスキュー事業」などの東北復興支援のほか、一貫して日本文化を世界へ発信し続け、ユネスコ世界遺産委員会においても富士山の登録を成し遂げた。

２　講演記録

皆様こんばんは。2 日前まで文化庁長官をしておりました、近藤誠一でございます。

久しぶりに鎌倉に戻ってきまして、先程、ガイダンス施設を拝見しましたけれど、やはりそこを囲む森、木々、遠くにかすむ海、何かこう独特の鎌倉の雰囲気、味わい、匂いといったものを感じまして、非常に懐かしく思いました。

鎌倉の世界遺産、挑戦ならず、取り下げということで、本当に残念でした。皆様もさぞかし、落胆されたことと存じます。私も、5 月 1 日でしたか、イコモスという諮問機関の勧告が不登録ということだったのを聞いて、本当に大きなショックを受けました。その報告書をつぶさに読んで、最初に思ったことは、世界遺産委員会が終わり次第、鎌倉に来て皆さんとお話しをしようということでした。

それまでに、取り下げになるのかどうか全く分かっておりませんでしたけれど、私が、6 年弱の間、中学、高校を過ごした鎌倉であり、先程ふるさとというふうに呼んでいただきましたけれど、私は逗子で生まれましたが、すぐに東京に行き、中学、高校が鎌倉で、あとは東京と、外交官になってからは、大体 40 年のうちの半分が外国でした。そういう意味で、日本でふるさとと言えるところがあるとすれば、確かに鎌倉かもしれません。6 年は短いかもしれませんが、何か特別の青春時代を過ごした思い出がございます。そういうことで今日は、この世界遺産へのチャレンジの跡を振り返り、そして今後のことを考える、皆さんと共に考えていく、そういう場にしたいと思っています。約 45 分位お時間をいただいておりますが、出来るだけ、幾つかの材料を提供させていただいて、皆様といろんなお話を進めたいと思います。

まず、皆さんよくご承知と思います。イコモスの勧告では、いろいろ書いてございまし

たけれど、何故不登録かというのを突き詰めて考えれば、結局は武家政権の成立の地という歴史的意義は非常に大きい、これは繰り返し、繰り返し、イコモスは述べております、歴史的意義は非常に大きいと。英語で、“very great historic value”という言葉も使っています。それだけの意義は認めつつも、しかし、それを目に見える形で体現している物が不十分だというのが一言で言えば、登録に値しないという彼らの判断の決定的な要素だったと思います。それは何かと言えば、ヨーロッパの人が多いですから、どうしても中世の都市と言えば、城郭があったり、そこに政権の拠点があり、経済の拠点があり、貿易の施設があり、そして、当時の人々が住んでいた街並がある。そういうものを中世都市として彼らは考えるわけです。そういう点から見ますと、鎌倉には、例えば、どこに頼朝が住んでいたか、あるいは執務していたかが、まだ考古学的と言いましょうか、歴史学的に証明されていない。見つかっていない。彼が鎌倉にいたことは間違いないと思いますが、そのモノが無いということ、見つかっていないということですね。そこが恐らく決定的な要因ではないかと思います。

しかし、それは日本としては充分承知の上で、中世の都市というだけではなくて、武家の政権が武家文化という独特の文化を創り出し、それが今の日本人の心にもしっかりと引き継がれていると、そういう意義を強調して、従って、お寺を中心とした、文化財、それから当時の鎌倉を守る、守り方として、三方を山で囲まれていた。そこに切通を造って敵の侵入を防ぐ独特の防御体制を作ったという、現在我々が目にすることのできる、そして物質的に証明のできるものに絞って、しかも政権ということではなくて、むしろ武家文化ということに重きを置いて推薦書を出したわけですけれども、結局は、都市という限りは、都市の中枢であった政権の跡、経済活動の跡、住んでいた市街地というのでしょうか、住宅街とか、そういうものがないということが決定的な理由になってしまったわけです。これは、実はこれから日本が世界遺産登録を目指していくに当たって、大きな課題であることのひとつを示していると思います。それを少しご説明したいと思います。

これからまた続々と世界遺産の候補地がでてきます。来年は、群馬県の富岡製糸場を推薦することになっておりますけれど、それ以降も、今、暫定リストにも 10 前後の候補地が並んでおります。そういったところを登録していくために、いろいろな課題がございます。日本ならではの課題も幾つかあるかと思います。特に私が石見銀山以来ここ数年、日本の世界遺産登録に携わって来た経験から見ますと、一番大きな課題と思われるのが、日本人の価値観と、世界遺産条約のもとにある明確な登録基準との間にいろいろなズレがある、溝があるということですね。幾つかあるのですが、具体的に一番重要な点を申し上げますと、登録基準の方は、西洋的な価値観で、常に推薦をしているものに、価値を体現するものが本当に現存し、目で見える、手で触れる、つまり物質的なものである、従って科学でそれが証明できるというところに大変な重きを置きます。これに対して日本では、必ずしも物が無くても、物証が無くても、充分なストーリーがあり、信ずるに足る、色々な傍証

があったり、記録があったりすれば、実際にその物がそこに無くても、それはその価値があるんだということをずっと信じて来たし、今も、将来も恐らくそういう対応を取って行くんだろうと思います。

例えば、ひとつの典型的な例が、一昨年世界遺産に登録されました平泉です。この時は一回目は記載延期ということで、3年後に出し直したわけですけれど、そこで構成資産の数を絞って出したにも関わらず、ひとつの構成資産である柳之御所という、藤原清衡が執務した建物の跡を除外するということをイコモスに勧告をされ、そして委員会もそれをそのとおり決定をした、というのがあります。これは、我々が主張している価値が、浄土教を体現したものということで、中尊寺の金色堂ですとか、毛越寺の庭園とか、そういう当時の浄土教の理念をいかんなく発揮しているものということで出したわけですが、イコモスは柳之御所というのは、確かに清衡がそこで執務したかもしれないけれど、その建物そのものには浄土教の思想が反映されていないではないかということで、これは除外すべきだということになったわけですね。

富士山の場合の三保松原も、ある意味では似たような論理で、三保松原は富士山という、これはイコモスも認めていた価値の、価値を持つ山の一部ではないではないかと、そこから見る富士山は綺麗かもしれないけれど、素晴らしいかもしれないけれども、山の一部ではない、従って世界遺産には該当しない、世界遺産を見る場であって、それ自身は世界遺産ではないのではないかという議論でした。すべてに共通しているのは、我々が価値を主張しているある物質があるとして、それが物であって、かつ科学的に当時の物であるとか、ユニークなものであるということが証明されなくてはいけないというのが世界遺産の一種の論理ですね。我々は、通常は歴史で習って、三保松原というのは色々な意味で、当時富士山に登ろうという人は、西から来た人は必ずそこを通って、そこから富士を拝んでから上がったとか、あるいは広重の東海道五十三次とか、北斎の浮世絵にもたくさんそこからの風景が出てくる。富士山を見る場としては、欠かせない所であると。三保松原があり、白い砂浜があり、そして遠くに富士山が見える。それはもう決まりきった富士山の定型パターンだ、というような我々の主張だったわけですが、イコモスはそこを理解しなかったわけですね。これは恐らく大きな溝だと思います。今回、三保松原は何とか委員会の理解を得て、そして目に見えない繋がり、科学的には証明出来ないかもしれないけれど、明らかに存在する目に見えないつながり、目に見えない価値というものを誠心誠意説得をして、委員国は殆ど全員がそれを理解してくれた、そして三保松原を入れろという意見が大多数を占めたわけです。

しかし、柳之御所の場合には、柳之御所そのものには確かに、浄土教を体現するようなデザインとかいうものは無いということで除外されてしまったということで、これから日本が色々な世界遺産の候補を出すに当たり、この問題は、いつまでも我々が直面する課題になると思います。従いまして、短期的に近い将来、何とか新たな遺産の登録を実現しようと思う場合には、できるだけ相手の基準に、相手の土俵に乗るということでなければ、

今回の三保松原、前回の柳之御所、そして鎌倉全体のようにイコモスとしては、充分な価値は潜在的にあるかもしれないけれど、その物証が無い、科学的に説明できていないということで外されてしまう。そうなれば、なかなか委員会でそれをひっくり返すことは難しいということですから、これからもずっと続く課題だろうと思います。しかしそこで、我々は決して諦めてはいけないのであって、長期的にはそういう日本的な価値観、考え方を、やはり世界にもっと知ってもらい、理解をしてもらうことが必要だろうと思います。そういう意味では、今回三保松原が認められたということは、そういう日本的な価値観、目に見えなくても充分な傍証があれば、物理的には山の一部ではない三保松原も富士山と共に世界遺産に登録して然るべきだという、そういう議論への理解が深まっていくと思います。

それは、ひいては日本人の物の考え方、お金とか、力とか、物、物質ではない精神的な価値観、美意識、そういったものにもっと世界が目を開いていく、そういう流れを作っていく上で、これは日本として権利であると同時に人類が今後、物質主義ではなく、精神主義をもっと取戻し、バランスを保っていく、そういう地球になっていく上で、日本の果たすべき役割であり、義務であるとすら考えております。従って、短期的には相手の土俵に乗る、しかし、常にチャンスを捉えて日本の価値観を主張し続けて、少しずつ理解する人、仲間を増やしていくということではないかと思います。

そういう意味では、今回の三保松原は、全体の 25 あった構成資産のひとつですので、そんなにメインではないこともあって、かついろいろな形で証明できる富士山との繋がりがあったので、認めてもらえました。小さい一歩ではありますが、先程申し上げましたような日本の価値観を少しずつ広めていく上では、一つの前進、良い一歩ではなかったかと思います。柳之御所については、将来、登録された平泉の拡張の候補としてリストに挙げております。そういう目に見えない、つまり清衡が執務した建物自身は、確かに浄土教は反映していないけれど、この世に浄土を創りたいという、その清衡の気持ちがあり、それがそこの場所から発信されて平泉ができた。柳之御所が無ければ、平泉は無かったんだというところへの理解が徐々に深まっていく、そうなれば、柳之御所も将来追加登録ということもできるだろうと思います。そういう観点から、鎌倉の将来のことも考えては如何かと思います。

それ以外にも幾つか日本にとっての課題、チャレンジがございます。

ひとつは、１.とも関係しますけれど、日本の思想、歴史、我々が当たり前と思っていることは、必ずしも世界の常識ではないということですね。これは、どこの国の世界遺産登録を目指す過程でも言えることかもしれませんが、特に日本という国の文化、歴史というのは、欧米の人は何となく上っ面は分かっていますけれど、本当に文化の根源に関わるところというのは、必ずしも分かっていません。従って、イコモスという諮問機関の専門家に説明をするに当たっては、その当たり前のことを、科学的に、論理的に、合理的に説明しなくてはいけない。

次の３．にも書いてありますように、英語とか、フランス語という、非常に論理性を重

んじる言語で、日本が主張している価値を説明しなくてはいけないということですね。これは、言うは易く、なかなか難しいことです。それは平泉の時にもつくづく感じましたし、石見銀山もそうでした。日本人が何となく、もやもやっと感じていること、それは、99%正しいと思われることであっても、それが本当に物、物的証拠を備えて説明ができなければいけないという、そういう、ある意味では厳しい世界であるということ、そこを少しずつ緩めていく、拡大していくのが日本の役目とは思いますが、現時点ではそこをしっかりしなければ、また不登録とか記載延期ということの二の舞が将来生まれてくると思います。

それから、合理的な戦略と申し上げたのは、イコモス、あるいは委員会の見方がますます厳しくなってきている、言い変えればそういう物的証拠があって完全に卓越した価値を体現しているものが揃っている、それらが全部本物である、そして他の地域には似たようなものは無いといったことを徹底的に調べ上げるものですから、それに耐える物に絞っていかないと、曖昧なものがあると、それが故に全体がダメになってしまうことがあるわけです。前回の平泉は、6つあった構成資産のうち、柳之御所を除けば良いですよという勧告が出ました。これはある意味ではやや異例だと思います。普通は充分に立証できないものが混ざっていると、それ故に全部が登録ではなくなってしまうことが多かったんです。

最近、イコモスはそれを意識してか、これを外せば我々としては良いです、という言い方を始めたような気がいたします。それが柳之御所であり、そして今回の三保松原だったわけです。従ってこれから、少なくとも当面は本当に自信のあるもの、どう考えても絶対に科学的に説明が出来るし、イコモスも委員会も OK だと言えそうなものに絞って行かないと、あやふやなもの、あやふやと見られるものが含まれていると、どうしてもちゃんといっぺんで登録出来なくなるという恐れが多分にあると思います。合理的というのはそういう意味でございまして、本当に100%自信があるものだけに絞る、これはなかなか、言うは易く行うのは難しいです。地元から見れば、是非うちの資産も入れて欲しい、うちだけが外されるのは困るという気持ちがあるのは当然です。過去の例で聞いた話、時々耳にした話ですけれど、折角皆でここまで準備したんだから、皆で行きたいと。自分のところ、あるいは幾つか外されるのは、忍び難いと、皆で来たんだから、皆で渡れば怖くない、ダメならダメで結構です、皆がダメなんだからという、非常にある意味で日本的で優しくて連帯心のある気持ちかもしれませんが、これは昔の旧帝国陸軍の突撃と同じであって、皆でいけば良いんだと、全滅しても良いんだと、皆でいくことが大事だということにちょっと通じるところがある。

これは、そういうメンタリティー自身は、良い悪いはなかなか言えませんが、少なくとも世界遺産の登録を目指すときには、このメンタリティーは脇に置いて、思い切って的を絞るということをしていかなければいけないと思います。日本にとって、この点はひとつの大きな課題だろうと思います。あとは、当然ながら、政府と、自治体と、地元の個人やNPO、企業といった官と民がしっかりと連携をするということ、これは当然のことですけれど、なかなか、これもまた世界の例を見ても、必ずしも円滑にいっているとは思いませ

ん。こういったことが、日本がこれから世界遺産を目指すに当たってよく考えなければいけないことだと思います。従いまして、鎌倉の再挑戦というのを目指すとすれば、ここら辺をもう一度しっかりと振り返って、これらの要件を充分に満たすように、１発でイコモスから OK がもらえるような、そういう準備体制を取ることが必要だろうと思います。

より具体的なことは後ほど簡単に触れますし、また恐らくご質問の中にも出てくると思いますので、ちょっと視点を変えて、創造都市、世界における都市の役割についてちょっと触れてみたいと思います。これは、鎌倉をこれからどういうふうにするかということを考える上で、単に世界遺産登録を目指すという以外にもいろいろな生き方があるということの例としてご紹介するわけです。まず、これからは国ではなくて都市の時代だということがよく言われています。何故かと言いますと、国というのは考えてみればかなり人工的に作られたものですから。非常にある意味で中途半端だということです。防衛、テロ、エネルギー、環境問題、そういう地球規模の問題を扱うには一国では小さ過ぎます。アメリカ、中国でさえ、自分の国だけでこの辺のことを処理することはできません。他方、一人ひとりの国民の健康、医療、福祉、そういった細かい毎日の関心に応えるには大き過ぎます。やはり、自治体、より小さな行政単位でないとうまく対応が出来ません。そして、時代がどんどん変わっていくなかで、その流れに応じて、市民の方々の希望に応えていくという機敏さに国というのは欠けます。シンガポールとか、北欧三国のような小さい国であれば、ややその辺は違うかもしれませんが、通常の国にはできません。

同時にグローバル化がどんどん進むと、いろんな情報がどんどん入ってくる。いろいろな文化の違いに自分たちが expose（注.晒す）されていきます、そうなると、一人ひとりが自分はいったい何者なんだろうかという自分のアイデンティティーを求めるようになります。そうするとそれは何かと言うと、国というサイズではなくて、やはり故郷、地域、都市、或いは農村であろうと思います。ますますこれからの人間は、グローバル化が進むにつれて、むしろ自分の故郷と、ふるさとと言えるもの、自分が心を許して話せる仲間たちのいるところに回帰をしていくのではないかと思います。

それから、地域の都市、地方の都市というものは固有の文化的な価値があります。先程のアイデンティティーとも関連しますけれど、日本文化と言っても、日本全体に共通した文化というのは、非常にふわっとしたもので、結局は地域、地域に根ざした歴史や伝統に根ざした文化というものが集まって、日本文化を作っています。そういう意味では、文化の起源というのは、一地方、一地方都市にあるんだろうと思います。そしてまた、自然、里山とかの自然風景もそのアイデンティティーの一部になります。ということで、これから人々が自然と一体となって、固有性を保ちつつ連帯して行く、そしてこの文化、芸術面で力を発揮していこうとする適当なサイズというのは、やはり都市だろうと思います。農村もある意味では入りますが、国ではなくて都市だというのが、今の世界の流れになっています。世界において、こうした都市を中心とする、都市が自分の魅力を再発見し、それ

を活性化することで発信してきた例がたくさんございます。もちろん、1番大きなインパクトのあるもののひとつが世界遺産です。これは、元々はエジプトのある有名な遺跡が、ダムを造る余波を受けて、水の底に沈んでしまうということで、それを救おうという運動が世界的に起こり、そのヌビア遺跡という遺跡を移転した。それがきっかけで、これから開発、あるいは自然災害からこういう貴重な財産を守らなければいけないという運動が起こって、この世界遺産条約にたどりついたということです。そういう意味では、都市の持つ文化、歴史といったものを大事にしていかなくちゃいけない、そこにこそ独自の価値があるんだと。それを皆で守っていこうというのが、この世界遺産条約です。

それ以外にも例えば、欧州文化首都というのは1985年からヨーロッパで始まった動きで、これからは、物を作るあるいは経済を成長させるだけの時代ではない、これからは都市がそこに独特の文化を発信することで、活性化し世界とつながっていく時代だという事で、毎年ヨーロッパ、今の EU の中の国の都市を一つ決めて、みんなで応援をしながらそこの文化、そこに独特の文化を大いに促進した、振興したと。それが順番に回ってきて、例えば1990年にはグラスゴーというイギリスの産業革命で栄えましたが、その後すっかり廃墟になった町が文化を通じて息を吹き返したという例がございます。そしてそれを見て、ユネスコも世界の文化都市、創造都市というものをネットワークで結ぼうということを行いました。それによって地方の都市は、自分の国だけではなくて、同じような分野、例えば建築で発信をしていこうという都市同士が結びつく、あるいはデザインとか食とかそういういくつかの分野で共通性を持つ他の国の都市と、国を通さずに、直接都市同士が結びつくということでお互いに学び合い、そして連帯をしてそれぞれの魅力を発信していく。それによって経済、社会を発展させていくということが始まっております。

そして同じような試みをアセアンでもやっておりますし、また、日本も数年前からこの文化都市、創造都市といったものを中心にして活性化を図って行こうということが始まりました。例えば、文化庁長官表彰というのを始めました。平成19年ですが、こういう文化創造都市を目指す、そしてそれについていい成果を上げた都市を表彰するという制度です。最初の年に横浜、金沢等々が受賞し、それ以降も毎年3つ、4つ、5つくらいの都市が表彰されています。表彰されることによって、そこの市は市民の方々、あるいは市長さんはこれでいいんだと、文化でこれから活性化していくということは正しい方向なんだということで勇気づけられて、一部にある反対の勢力を説得することができるという効果が表れております。

それからもう一つはモデル事業というもので、より良い試みをやっている都市に対しては若干の助成金を出すことによって、その目的を達成することをご支援するということを始めました。日本でも遅ればせながら、この文化を使った都市の活性化、それを通じた地方の活性化、そして日本の再生という動きが始まったことになります。先ほどの話に戻りますが、スライドの一番最後に東アジア文化都市というのがあります。これは、こうしたヨーロッパやアセアンでやっている文化都市を通じた連携というものを東アジアでやろう

というのを日本が提案をいたしました。日中韓文化大臣会合というのがありますが、その場で日本から提案し、そして中国、韓国がそれに同意をしてきました。いよいよ来年初めて、東アジア文化都市というのがスタートします。毎年一つの都市を三ヶ国で回して行こうということで、3 年に 1 回、ある国の都市が東アジア文化都市となり、そして 3 つの国が協力して、その都市を盛り上げて行くということですが、最初の年だけは皆で一緒にやろうということで、来年の 2014 年は、日本は横浜、韓国は光州、中国はまだ決まってきませんが、いずれ発表になると思います。それを来年、東アジア文化都市として決めて、国が、そしてまた他の東アジアの国が応援をすることで、文化を使った都市の活性化を東アジアでもやっていこうということになっています。まあ、そのような流れがあるということを考えることが、これからの鎌倉を考える上でも一つの参考になるのではないかと思います。

先ほどグラスゴーの話をしましたけれども、本当に成功した例が沢山あります。スライドの一番上のナント市というのは、フランスのロワール河の河口にある大西洋に面した町です。ここは、元々は奴隷貿易の中継地であったところです。そしてやがて造船業で栄えました。しかし、造船はその後北欧に移り、日本に移り、韓国に移りということですっかり廃れてしまいました。ところが 80 年代に、ジャック・エローという人が市長になりましたが、その時に、ナントは文化を中心にして栄えるんだということを唱えて当選しました。そして、思い切った文化政策をとりました。もう廃墟となっていたロワール河の真ん中にある島の古い造船施設を全部造り変えて大きな文化施設を造りました。それから、「ラ・フォール・ジュルネ／熱狂の日々」というクラシック音楽の音楽祭をやりました。これは、それまでのクラシック音楽というのは、みんなちゃんとした服装をして、畏まって聴くものだというそういう高級な市民のものだという考えをすっかり取り払って、一般庶民が子供連れでセーターで行ける、そしていい音楽を聞けるという、そういう新しいコンセプトを導入して、これが大成功しました。そして日本でも 8、9 年前からですが、それを導入して今や東京、新潟、金沢、琵琶湖、そして北九州の鳥栖というところでこの「ラ・フォール・ジュルネ／熱狂の日々」というのを毎年開催しています。世界中から若い、中堅のアーティストが来て、この日本のいくつかの都市を周って、その都市のテーマである音楽を奏でることによって、地域の人たちが気楽にクラシック音楽を楽しめるという動きが日本でも広がっております。その大元になったのがこのナント市です。

それ以外に先ほど申し上げたグラスゴー、グラスゴーは建築ということで新しい魅力を発揮し、それが大成功して、一時期は本当に廃墟となり犯罪の町であったグラスゴーは、いまやイギリス人が行ってみたい、住みやすい町というふうにランク付けされるようになりました。ナント市も同様で、一時期は本当に廃墟であったところがこの文化で再生することによって、若い人がパリから戻ってくる、それどころか他の地域から移住する人が増えてきたそうです。フランスの中でも、『ル・ポワン』という雑誌がありますが、そこでも、フランスで最も住みやすい町、住んでみたい町として何度もトップにランクされています。

そのような世界の例を見て感じたことは、都市が文化というものを使って成功するには、いくつかの要件があるということです。いろいろありますが 5 つほど、幾つかの論文や本も出ておりますが、その中から私の目から見て重要と思われる 5 つのことをここに書いておきました。

ひとつは、「リーダーの先進性」です。市で言えば市長さんですね。これまでの旧来の枠にとらわれずに、新しいことをやってみようという先進性を持つこと。それから当然ながら民主主義がどんどん広がっていますから、そこに住む「市民の方々の理解と協力」がなければならない。それから、市長さんは文化のことばかりやっているわけにはいきませんから、文化政策について任せ切れる、任して十分なことが成し遂げられるような「才能ある芸術監督的な人」が必要であるということ。それから、その地域の魅力を発信するには、「地域の独特の魅力というのを、うまく自分たちで見つけて」発信していかなければいけないということ。最後は、「寛容性」。これは異なる価値観というものを取り込み、これまでとは全く異なるアイデアを持った人をどんどん受け入れて、意見を採用していく心の広さ、寛容性がないと、古い殻に閉じこもっていたのではこれからのグローバルな競争の中で、都市が自分の文化を中心にして、発展していくことはできないということで、この 5 つぐらいの要素があることによって、これまで成功してきた町はその文化を活性化の軸にしてきたということが言えると思います。

そうしたいろいろな世界の流れの中で、鎌倉は今後どうするのかは市民の皆様方が十分な議論をした上でお決めになることだと思います。世界遺産をせっかく目指してここまで来たんだから、もちろん再挑戦というのが優先課題だと思います。そのためには先ほど申し上げたようないくつかの点をクリアしなければならない。特に、今のイコモス、あるいは世界遺産委員会の考え方、土俵の中で勝負するには、当時の政権の跡というものをしっかりと科学的に証明できるような体制にしなければいけないと思います。そのためには調査、研究、発掘といったことを、相当程度しっかりとやって、他の中世都市に負けないような材料というものを提示できなければいけない。歴史上大切であるということはイコモスも認めているわけです。それを証明するものを見せればいいわけですね。それが簡単ではないことはよく分かっていますが、そこが今回の不登録の最大の理由だったとすれば、そこをクリアしなければ、少なくとも短期的には登録は難しいと言わざるを得ないと思います。

先ほど、ガイダンス施設を拝見いたしましたが、そこで本当に感じたのですが、今の制度では、イコモスの中につくられる 20 人から 30 人ぐらいのパネルが、書類を読むだけで判断をするんです。イコモスのミッションが 1 人来ますけれど、そのミッションの役割は価値があるかどうかを見るのではなくて、保全状態がちゃんとできているかどうかだけを見るんですね。それについての報告をして、価値については一切触れません。且つ、その人はパネルにも参加しません。従って、大切なのはそのパネルを構成している 20～30 人ぐらいの人たちが書類だけでどう評価するかということになります。そうなるとやはり物的

な証拠があるということがなければいけない。先ほど、そのガイダンス施設の話をしましたが、実際に来てくれれば、来てこの雰囲気を感じてくれれば、ああこれは素晴らしい所だと。三方を山に囲まれ、ここに最初の武家政権が出来たのだなあと、何か心で感じていると思います。そういう風に感じてくれれば、もう少しいい点が取れたかもしれません。しかし、今のルールと言いますか、原則ではそれはしないということですから、あくまで書類で審査をする、その書類に十分な論理性と科学性がなければいけないということを考えれば、更なる十分な調査、発掘等をしなければならないということは明らかだろうと思います。

それからそれを進めて行く上で、大事なことはやはり、地元の方々の理解と熱意だろうと思います。半年や 1 年で素晴らしい遺跡が発掘できるとは思えませんし、長い期間かかるかもしれないこの作業を、本当に情熱を持って、前に進んでいくということは相当なエネルギーと夢と情熱とが必要だろうと思います。それをしっかりと確立し、自分の町に誇りを持ち、それをもっと科学的に証明するものを見つけようという意欲が市民の中にあって初めて発掘調査も進むと思います。

また同時に、最近非常に厳しくなっているのが、保全管理の話です。今度の富士山もそうですし、登録されたものでも必ず色々な注文が付きます。例えば平泉で言えば、電線、電柱が沢山あると、これは景観上問題があると、そういう細かい指摘も受けます。石見銀山もそうでした。石見は既に地下に埋めました。そういう意味では景観の維持、そして商業化、都市化といったものをしっかりと防ぐ体制ができているということも証明できなければいけません。そのためには、やはり地元の方々の理解と協力が不可欠だと思います。いろいろコストもかかるし、若干の不便もあるかもしれません。それによって鎌倉の持っている価値がよりはっきりし、それが市民の方々にも、また子どもたちにも一層より良く認識され、そしてそれが世界にも証明できるようになる。そうなることは鎌倉の将来にとっていいんだと、自分たちの子や孫にとって必要なんだと、だから今、我々はそれをするんだという思い切った覚悟と情熱がやはり必要だろうと思います。そういう体制を取り、それを継続していくこと。継続は力と言いますか、まさに世界遺産登録への道というのは、短期的な 100 メートル競走ではなくて、一種のマラソンに近いものだと思います。マラソンには持続力、目標に向かって進む、諦めずに進む情熱とそういったものがなければいけません。そういったものをしっかりと確保しつつ、前に進んでいくということが世界遺産に必要な要素だろうと思います。それ以外にも、先ほど申し上げましたような歴史・文化・伝統といったものの魅力を別の形で売り出すと言いましょうか、市民の方々が再認識し、そして世界にそれをアピールして行く、そういうやり方もあります。

文化創造都市、あるいは東アジア創造都市、横浜の次はまだ決まっておりません。今回も幾つかの都市が手を挙げましたけれども、そこに参加することを一つのステップにすることもあるいはあり得るかもしれません。あるいはユネスコのネットワーク、これにも日本は金沢、神戸から始まって、いくつかの都市が登録して、そしてその分野の他の国の都

市と連携を始めています。そういう形で取りあえず今あるネットワークとかシステムの中で、鎌倉の魅力を市民の方々が再認識し、他の人にも分かり易いように説明しアピールして行くという、そういう習慣と言いましょうか、調査研究を含めたそういう作業を日常的に進めて行くような姿勢を取って行くことでそれが積み重なって、そう遠くない将来に再挑戦が可能になる、そういう考え方もあろうかと思います。

私からどっちの方向へ向けということを申し上げる立場にはありませんけれども、今申し上げたようなことを参考にしていただいて、市長さん以下、あるいは県知事さん以下、皆さんでじっくりと議論をしていただいて、方向性を決めていただければと思います。時間が来ましたので、私の話はここで一段落にしまして、ぜひ皆様方からご質問やご意見を頂戴できればと思います。

《質疑応答》

質問①：　どうも先生ありがとうございました。今まで鎌倉で調査、研究、発掘されてきていると思います。今後も歴史学 1 級史料から 6 級史料、それを細かく分析し、今までの発表とか参考史料とかどこを探しても、私の拙い研究では見当たらないので、できればそこを先生が、物証が大事だと、調査、研究、発掘、今後も今までも 1 級史料は国宝とかでわかるのですが、2 級から 6 級史料をできれば教えていただければありがたいと思います。今までの 2 級から 6 級の史料を歴史方法学で。どうもありがとうございました。

回　答：　ご質問の意味がちょっとわからないのですが、2 級から 6 級の史料をもっと研究した方がいいかということですね。もちろん人的及び時間的制約はあると思いますが、経済的、財政的には困ると思いますが、もちろん物証、あるいはそれを間接的に証明する、科学的に証明するものが多いほどいいわけですが、やはり、量と同時に質も大事だろうと思います。特に、イコモスがはっきり言っている政権の跡、経済活動あるいは市民の生活を表しているものが無いというところ、それが大きな今回の不登録の要因となっていると思いますから、そこをやはりなんとかして手をつけないといけない。歴史史料だけでは間接的で、イコモスも歴史的な価値は通常にあると、冒頭に申し上げたことを言っているわけですから、やはり、これが何とかの跡であったと、で、当時はこういう史料もあって、それがここで確認されたというようなところまでいかないとなかなかイコモスを説得することはできないのではないかと思います。

質問②：　長官も今言われた、物的な証拠がないということについては、文化庁もそう思っていらっしゃるのかと思っていたのですが、私は、不記載勧告は「Home of the Samurai」というこの線で行ったのでは今後も駄目だよという老婆心があって、

不記載までという一番厳しいことを言ってくれたのだと思っています。鎌倉の今度出した場所の部分はhistorical zoneと考えれば室町から江戸､明治までずっと、私たちの祖先が頑張ってきた色々なものが残っていて、それが全く物的な証拠として出せるわけで、やはりそういう方向に行くべきではないかと思います。ヨーロッパでフィレンツェの歴史地区とかローマの歴史地区とかができていますよね。やはり鎌倉の場合は、山に沿ったhistorical zoneが価値があると、そういう出し方にすれば、徳川幕府の功績も何も全部書けるわけで、極端に言えば、戦後の古都保存法の運動で山が全部保全された話まで出せるわけなので、何となく私はそういう方向に可能性があるのではないかと思いますが、いかがでしょうか。

回　答：　その可能性はあると思います。実は今回プノンペンでイコモスをはじめとする専門家と、何故鎌倉に対して不登録という勧告をしたのか、じっくり話そうと思っていたのですが、向こうも忙しいし、こちらも富士山で手一杯でしたので、十分な議論ができていません。専門家同士で話をさせましたが、必ずしもはっきりとした話はしてくれませんでした。私もこれからは文化庁長官ではなくなりましたが、引き続き、その鎌倉の将来には個人的にも強い関心がありますし、責任感も感じておりますので、近いうちにできればそういった人とじっくり議論をして、どういうコンセプトが一番あり得るのか考えてみたいと思います。その中で、中世の都市、先ほど申し上げたような政権があり、経済があり、そういうコンセプトで行くのか、全く違った、今、物証があるものだけに絞ってそれを別の新しいコンセプトで行く方が現実的なのか、その辺は今、この時点ではどちらがいいとは分かりませんが、その辺はこれからじっくり議論していきたいし、鎌倉市としても、神奈川県としても、今後様々な機会がおありでしょうから、そういう世界の専門家と突っ込んだ議論を、これまでも何人もの外国の専門家に来てもらっているわけですから、改めてそういった方がたにイコモスの判断をどう思うのか、どうしたらそれをうまく再チャレンジできるのか議論していただければと思います。

historical zoneで行けるかどうかは、私も本当にわかりません。切通の話をしている中でイコモスが、三方を山で囲まれて、独特の防衛施設になっていると日本は主張するが、どこの町も防衛のためにはその地形を利用していると、そういう地形を最大限利用しなければ本当の防衛はできないと、そういう意味で三方を山に囲まれ一方が海だというのはそれが outstanding な、つまり本当に卓越した方法とは言えないという判断をしています。そこが一つの壁になるかもしれません。そこを説得する形でhistorical zoneで行くのか、それとも、やはり今物証のあるお寺だけにするか、でもそれではなかなか京都にはかなわないかも知れません。そこら辺は、我々は禅ということも考えたこともございますが、これも禅寺

があるのは鎌倉だけではない。鎌倉時代の発達、それから茶の湯とか武家文化というところに注目したわけですけれども、禅だけではやはり京都があるということで難しいということで、なかなか的を絞り難い。しかし、鎌倉に素晴らしい価値があることは、これはイコモスが何度も認めているわけですが、それをどうやって物証を伴った、いいコンセプトをどう出すか、そこにかなりの工夫がいるのかなと思います。

質問③：　今の historical zone というのには私は非常に賛成なのですが、世界の常識ということで、私は考えてみまして、実は『National Geographic Magazine』という雑誌の撮影とか取材をしている経験で申しますと、鎌倉のまちって何を一番メインに持ってこなければならないかと言いますと、飛行機から撮って、三方を山で囲まれてそしてその下に町があると、そしてそこの町が栄えているという形で撮りたいというふうに思うわけです。そうするとなんかシャッターストリートとかでいろんな交通問題で、それがいろいろな問題があるとその辺は改善して良いところだけを採らないといけないというふうに思うし、歴史の発掘なんかもまだ、資金的に、鎌倉の財政をもっと整えて、収入が上がることは十分にあると思いますので、それでしっかりまちづくりをしながら歴史の発掘を、市民の皆さんにやってもらえるようにして作って行けば、必ずいい世界のモデル都市になれると思います。よろしくお願いいたします。

回　答：　全く同感です。ちょっと私の答えが長すぎて時間が来てしまって申し訳ありませんが、おっしゃる通りだと思います。いろいろな可能性はあると思います。そのどれを、どういう形で追究していくのが一番近道か早道か、且つ確実な道か、これをぜひ短期間で集中して議論いただいて、また外国人の意見も聞いて、方向性を定めて、そしてそれに向けてしっかりと前進をしていただきたいと思います。ありがとうございました。　以上